様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１３１１１

研究課題名（和文）空範疇の仮定によるドイツ語不定詞名詞化項構造の研究

研究課題名（英文）An argument-structural study of German infinitive nominalization under the assumption of an empty category

研究代表者
小林　大志（Kobayashi, Taishi）

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：１０８８０６９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，befragen「尋ねる」に対するdas Befragen「尋ねること」のような，動詞の不定形をそのまま名詞に転じるドイツ語の不定詞名詞化（IN）の観察を通じ，項構造（構文的に表わされる要素に関する語彙的情報）と品詞・語形の関係を探った。INに前置された属格（日本語における「〇〇の」）の解釈と，使役・起動交替に関わる動詞（日本語における「壊す・壊れる」のような動詞のペア）のINの観察から，次の2点が示された。［１］INは基盤動詞と共通した項構造を持つ。［２］INの項構造の実現には，動詞的不定詞（英語におけるto不定詞）の主語として仮定されるような音形のない要素が用いられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
動詞の名詞化は，動詞と共通の意味関係を持つことから，動詞の構文的性質を決定づける項構造と，品詞・語形の関係を理解する手がかりとして重要である。ドイツ語には派生名詞化と不定詞名詞化（IN）という2種類の名詞化があり，従来の研究において，後者は前者に対して「動詞的」とされてきた。こうした学術的文脈において，本研究の成果は，INが項構造に関して非常に（従来の想定よりも一段と）動詞性が高いことを意味している。したがって，今後の研究では，ドイツ語における項構造と品詞の関係を，従来よりも柔軟に考えることが必要である。

研究成果の概要（英文）：This study has investigated the relationship between argument structure (lexical information about syntactic elements) and the lexical category form through observations of German infinitive nominalization (IN), which transforms infinitive verbs into nouns, e.g. befragen 'to interview' into das Befragen 'the observing.' Based on the patterns of interpretation of prenominal genitives and INs of causative/inchoative alternating verbs, the following two points were proposed: [1] INs share the same argument structure as base verbs; [2] the realization of the argument structure of INs uses an empty element which is traditionally assumed to be the subject of the verbal infinitive.

研究分野：言語学

キーワード：項構造の継承　不定詞名詞化の動詞性　空範疇主語　名詞化の種別　属格の解釈

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

項構造は，動詞などの語の語彙的な意味と統語構造を結ぶインターフェースである。したがって，項構造について理解することで，語の意味とその語が形成する統語構造の関係を体系的にとらえることが可能になる。動詞の名詞化は，基盤動詞との意味的なつながりを持ち，それゆえ基盤動詞に由来する項構造も持つと考えられるため，項構造と品詞・語形の関係を探る手がかりとして適している。実際，動詞の名詞化の研究は，長年にわたり，語の意味と統語構造の関係について多くの知見をもたらし，言語学の学術的進展に大きく貢献してきた。

本研究が対象とするドイツ語の不定詞名詞化は，動詞の不定形をそのまま（語形を変化させずに）名詞に転じる文法形式である。不定詞名詞化には基盤動詞の項を属格項として実現する特徴があり（例 1，2），項構造と品詞・語形の関係を探る上で格好の研究対象である。

ドイツ語には，不定詞名詞化とは別の名詞化として，接尾辞化や変音により語形が変化する派生名詞化がある。派生名詞化には様々なタイプが存在するが，UNG 名詞化は中でも中心的な形式として知られている（例 3）。派生名詞化は書き言葉を中心に日常的な言語使用において多用されることから，これまでのドイツ語の名詞化研究は，主に不定詞名詞化ではなく，派生名詞化を対象に行われてきた。派生名詞化に関する過去の研究では，UNG 名詞化の項構造について，基盤動詞の項構造と密接に関係しつつも，完全には一致しないことが明らかとなってきている（図 1）。

例 1:基盤動詞句
das Haus *überwachen*
the house.ACC observe.INF
家を警備する

例 2:不定詞名詞化句
Überwachen *des Hauses*
observe.IN the house.GEN
家の警備

例 3:UNG 名詞化句
Überwachung *des Hauses*
observation.DER the house.GEN
家の警備

不定詞名詞化については，一般的な認識として，複数形を持たない（複数形の冠詞を付した *die Überwachen は不可），非事象的解釈を持たない（Überwachung は見張りのための組織・人員なども表し得るが，das Überwachen はそうした解釈を持たない）といった特徴が知られている。そのため，これまで多くの研究者が不定詞名詞化を「動詞的」な形式と位置付けてきた。不定詞名詞化が「動詞的」であるという認識は，これが項構造の点でも「動詞的」なのではないかという予測をもたらす。この予測は，「動詞的」というのがどういう意味かという問題とも関係している。

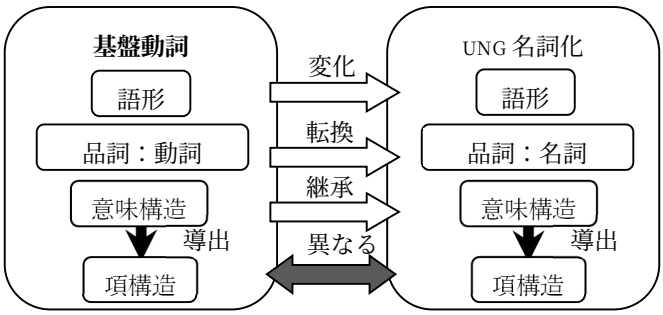

図 1：UNG 名詞化の項構造は基盤動詞と一致しない

２．研究の目的

申請当初における本研究の目的は，不定詞名詞化が基盤動詞と同一の項構造を持つ（不定詞名詞化は基盤動詞から項構造を継承する）という仮説（図 2）を具体的な言語データに照らし合わせて検証することで，不定詞名詞化の項構造と基盤動詞の項構造の関係を解明することであった。本研究が検証した仮説は，不定詞名詞化が「動詞的」であるという認識をストレートに反映している。研究を通じて，この仮説に対する肯定的な結論が得られたが，申請当初においては，この仮説が棄却された場合に，言語データに照らし合わせて適切な修正仮説を提示することも本研究の目的であった。

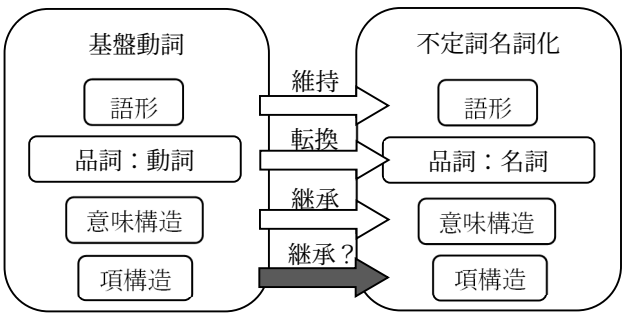

図 2：不定詞名詞化の項構造は基盤動詞と同じ？

３．研究の方法

(1)本研究にあたっては，理論的枠組みとして，以下の 2 つの枠組みを採用した。

①語彙の分析手法として，本研究は，二階建て意味論(Zwei-Stufen-Semantik)を採用した。二階建て意味論は，ドイツの言語学者 Manfred Bierwisch が開発し，その後継者によって発展が続けられている分析手法で，漠然とした存在である意味を，意味形式(Semantic Form: SF)と概念構造(Conceptual Structure: CS)の二つの階層に分ける点に特徴がある。二階建て意味論では，意味のうち，文法の規則に直接関係し，命題的意味として構成的に反映されるもののみが意味形式として扱われ，それ以外のものは世界知など言語外的な知識とともに概念構造に含められる。この枠組みに従い，本研究では語を音韻構造 (Phonological Form)，文法素性 (Grammatic Feature)，項構造，意味形式の 4 情報の束として分析した。この分析手法は，日本国内の研究では必ずしも主流でないが，ドイツ語圏では非常によく使われている手法で，語の意味を出発点に意味と構文の関係をボトムアップに考察することができ，さまざまな統語論と整合する利点がある。

②統語論の枠組みとして，本研究は生成文法の統語論を採用した。その際，本研究独自のものとして，通例動詞的な不定詞節に想定されている音形のない代名詞要素 PRO（例 4）を不定詞名詞化に対しても採用した（例 5）。PRO は，母文要素に束縛されるか，不特定の存在として解釈を受けると考える。

例 4：不定詞節の PRO
Wir haben eine Firma damit beauftragt, PRO ***das Hauses zu*** *überwachen.*
we have a company with_it entrusted, PRO the house.ACC to observe.INF
私たちは業者に家を警備するよう依頼した

例 5：不定詞名詞句への空範疇の仮定
Wir haben eine Firma mit ***dem*** PRO *Überwachen* ***des Hauses*** *beauftragt.*
we have a company with the PRO observe.IN the house.GEN entrusted
私たちは業者に家の警備を依頼した

不定詞名詞化への PRO の想定は，不定詞名詞化が基盤動詞と同一の項構造を持つという本研究の仮説と関係している。動詞を中心とする文の統語構造が複数の項位置を持ち，複数の項を違いに区別しながら明示的に実現することができるのに対し，名詞句の統語構造には構造格が属格しかなく，複数の項を互いに区別しながら明示的に実現することができない。そのため，不定詞名詞化が動詞と同じ項構造を持つという仮説には，複数の項がどのようにして名詞句の統語論で処理されるのかという問題を内包していた。PRO の採用は，この問題に対する解決策として研究代表者が考案し，申請当初より予定していたアプローチである。

(2)経験的実証に関して，本研究は，言語学の研究におけるオーソドックスな手法を採用した。すなわち，質と量の両側面を視野に入れたコーパスデータの観察とドイツ語を母語とするインフォーマントへの聞き取り調査を併用する手法である。なお，コーパスに関して，本研究ではベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー(Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften: BBAW)が公開しているオンライン辞書検索サービス「ドイツ語デジタル辞典」(Digitales Wörterbuch der Deutschen Sprache: DWDS)において利用可能な無料コーパス群を活用した。これは，同コーパス群がタグ付きコーパスであり，品詞を指定した検索が可能であることに理由がある。本研究の対象である不定詞名詞化は，動詞の不定形と形態論上の語形が同じであるため，品詞を指定した検索を行わなければ，同じ語形の動詞とのデータの選別に困難が生じる。また，後述のように本研究では固有名詞に関するデータの収集を行ったが，人名に代表される固有名詞には共通するような形式的特徴がなく，タグによる検索によらなければ用例の収集が困難である。この点において，品詞に関するタグ付けが行われており，固有名詞が個別のタグとして用意されている BBAW のコーパス群は，本研究におけるデータ収集に適している。

４．研究成果

(1)本研究では，主な成果として，以下の 2 つの知見が得られた：

①不定詞名詞化が基盤動詞と共通する項構造を持つという本研究の仮説が，肯定的に裏づけられた。この成果につながる重要な観察は，使役・起動動詞の不定詞名詞化に関するコーパス調査の結果として得られた。

使役・起動動詞は，状態変化を表す動詞の下位グループである。このグループの動詞の特徴は，その状態変化が動作主の働きかけによって生じる使役的な場合と，動作主の働きかけなしに生じる起動的な場合があることにある。例えば，英語の break は，使役的な場合には他動詞構文（He broke the vase.)が用いられるのに対し，起動的な場合には自動詞構文(The Vase broke.）が用いられる。ドイツ語の使役・起動動詞には，使役的な場合に一貫して他動詞構文が用いられ

るのに対し，起動的な場合には，動詞により，自動詞構文が用いられる動詞（Die Vase zerbrach. 花瓶が割れた）と再帰代名詞 sich をともなう再帰構文が用いられる動詞（Die Tür öffnete sich. ドアが開いた）の 2 タイプがある。ドイツ語の 2 タイプの使役・起動動詞を巡っては，その違いを構成的に捉えるべく様々な提案がなされたが，現在では，両タイプの違いはもっぱら構文的なもの（つまり，項構造に関するもの）であって，意味（意味形式）に違いはなく，一見して意味的な違いは構文的な違いから副次的に生じているという見方が有力となりつつある。すなわち，ドイツ語の使役・起動動詞は，他動詞・自動詞タイプでも他動詞・再帰動詞タイプでも意味形式は同じだが，後者のみ，起動的な場合に意味形式と結びつかない空な項が投射され，再帰代名詞の形で実現するのである。

本研究では使役・起動動詞の不定詞名詞化についてコーパスから用例を収集し，その解釈（使役的・起動的）を分析した。その結果，他動詞・自動詞タイプの使役起動動詞の名詞化では，使役的な解釈も起動的な解釈もともに認められるのに対し，他動詞・再帰動詞タイプの動詞の名詞化は，もっぱら使役的な解釈を持ち，起動的な解釈の例が非常に少ないことが明らかになった。

この事実は，不定詞名詞化が基盤動詞と共通する項構造を持つという本研究の仮説の下では，再帰的起動動詞の不定詞名詞化も動詞と共通の項構造を持ち，その中には意味形式と結びつかない空の項も含まれることが導かれる。上に述べた事実は，この空の項が，名詞句の統語構造において適切に処理できないことを反映していると考えることができる。他動詞・再帰動詞タイプの使役・起動動詞の名詞化では，統語論において処理できない空の項を持つ起動的解釈が回避された結果，実際の用例において使役的解釈が優越しているのである。

②不定詞名詞化の項構造の実現には PRO が用いられるという本研究のアイデアについて，肯定的に裏づけられた。この成果につながる重要な観察は，不定詞名詞化に付された前置属格の解釈の分布に関する調査から得られた。

日本語の「○○の」にあたる属格は，ドイツ語では，主名詞に対して前置される場合(Pauls Haus パウルの家)と後置される場合(das Haus des Mannes その男の家)がある。もっとも，現代ドイツ語の前置属格は Paul のような無冠詞の固有名詞に限られている。とはいえ，無冠詞の固有名詞に限って言えば，文語でも口語でもよく使われる非常に生産的な形式である。

本研究では，コーパスから前置属格の付された不定詞名詞化の用例を収集し，その解釈の分布を調査した。この調査と並行して，対照群として，派生名詞化の中でも中心的な ung 名詞化に付された前置属格についても収集と同様の分析を行った。その結果，不定詞名詞化に付された前置属格には，名詞化によって表現される状況に動作主がいる限り，優先的に動作主として解釈され，当該の状況に動作主がない場合に初めて他の意味役割での解釈が可能であることが示された。一方，ung 名詞化に付された前置属格については，特段の規則性は認められなかった。

コーパス調査で示された不定詞名詞化の前置属格の解釈分布は，動詞の構文における主語の解釈分布とよく似ている。動詞の構文において，動作主は他の意味役割に優先して外項となり，高い統語的位置に表されることが知られている。意味と構文の関係を扱うあらゆる枠組みが，何らかの形でこの関係を反映した仕組みを備えている。不定詞名詞化が基盤動詞と同一の項構造を持つと仮定すると，不定詞名詞化の項構造には，動作主を外項として高い統語的位置に反映する仕組みも備わっていることが導かれる。

不定詞名詞化の統語構造に PRO を採用する本研究のアプローチでは，外項として高い統語的位置に投射される動作主が，PRO を通じて，自ずと前置属格に結びつく。というのも，動詞の構文において，PRO は母文要素に束縛されるが，不定詞名詞化内部の PRO も同様に束縛的な解釈を受けると考えられるからである。PRO は不定詞名詞化の内部において，高い統語的位置を占める。PRO の束縛者となるのは前置属格がなければ母文要素だが，前置属格がある場合には，前置属格が束縛者となる。すると，前置属格は，高い統語的位置にある PRO を通じて，優先的にこの位置に投射される動作主と結びつく。不定詞名詞化の前置属格が持つ動作主以外の解釈は，動作主がない場合にのみ，PRO として投射される項が項構造にないことを反映して生じる付加語的な解釈である。一方，派生名詞化は PRO を持たず，それゆえ前置属格は必ずしも動詞の外項には結びつかない。

(2)上記の研究成果は，国内外での研究において，次に指摘するような価値を持つ：

①研究開始当初の背景にも述べた通り，多くの研究者によって「動詞的」であるという指摘がなされてきた。本研究の成果は，不定詞名詞化の動詞性が項構造にも当てはまることを示す点で重要である。しかも，本研究では，不定詞名詞化の項構造は，単に動詞の項構造と同じ項からなるというだけでなく，動作主を高い位置に投射する写像的な仕組みも備えていることが示された。つまり，不定詞名詞化は項構造に関して，従来考えられてきたよりも高いレベルで「動詞的」なのである。

②不定詞名詞化の分析に PRO を採用する提案は，管見の限り本研究の他には知られておらず，非常に独自性が高いものである。本研究において PRO を用いた不定詞名詞化の分析に一定の妥当性が見いだされたことで，不定詞名詞化と関連する様々な構文を扱う意味論的・統語的研究において新たな基盤が築かれた。この成果を踏まえ，不定詞名詞化と関連する様々な構文についても，

PRO の存在を念頭に観察することで，これまで見過ごされてきた新たな言語事実が見いだされる可能性がある。

(3)本研究の今後の展開では，次に指摘する課題が重要である：

動詞の名詞化に関する研究では，近年，名詞化を統語論から独立した領域としての語彙の内部で生じる造語論的プロセスとみる語彙主義的な立場と，統語論の内部で機能範疇の投射によって生じる純粋に統語論的なプロセスとみる統語主義的な立場の論争に注目が集まっている。本研究では採用した枠組みとの関係で語彙主義の立場に立脚したが，統語主義の可能性に対する特別の見解は示されなかった。今後，統語主義の立場からも本研究の成果に対する検証が行われれば，語彙主義的対統語主義という論争にも新しい知見が得られるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Taishi Kobayashi	４．巻 167
２．論文標題 Agensorientierung und Flexibilitaet. Zur thematischen Interpretation des praenominalen Genitivs und des Possessivpronomens bei Nominalisierungen im Deutschen	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Neue Beitraege zur Germanistik	６．最初と最後の頁 174-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11282/jgg.167.0_174	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 Taishi Kobayashi
２．発表標題 1 Zur "verbnahen“ Argumentstruktur von Infinitivnominalisierungen im Deutschen: Unter Beruecksichtigung der Nominalisierungen von alternierenden Kausativ-/Inchoativverben.
３．学会等名 日本独文学会第49回語学ゼミナール
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関